



TITLE:

ウイグル文獻の蒙古人に對する影響

AUTHOR(S):

ヴェ・バルトリド; 石濱, 純太郎

CITATION:

ヴェ・バルトリド ...[et al]. ウイグル文獻の蒙古人に對する影響. 東洋史研究 1938, 3(4): 347-351

ISSUE DATE:

1938-04-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145615>

RIGHT:

ウイグル文獻の蒙古人に對する影響

V. Bartol'd. K voprosu ob ujnurskoj literaturě i eja vlijanii na mongolov.

(Živaja Starina. God XVIII, Vypuski II—III, str. 42—46, 1909.)

ヴェ・バルトリド
石濱純太郎譯

西部波斯^①でデエライル族又はデエライル家の國で十四世紀の後半頃、書記官の Muhammed-Hindushan によつて、國務の書記官や公用文書掛のものゝ手引として編纂され、未だ出版になつてゐなかつた波斯文の書物から、故 P. M. Melioranskij は數條を抜いて、千九百年に之を校刊した。^②この書の中に數へあげられた官職の名稱と其等の官職を設けた際に與へた辭令の内容とは、成吉思汗の孫に波斯へ連れて行かれた此の遊牧民族が、其國を征服してから百年も經過しても尙自分の最初の故郷の性質や思想に依據してゐる事を明示してゐる。是等の官職は蒙古帝國崩壞後に出來た他の國々にてても記載されてあるが、其職務の特質はムハメ

ッド・ヒンズーシャフの著程に詳細に説明されてゐないから、隨つて此書は波斯のみならず他の蒙古人の國特に金黨汗國の歴史にとつても重要な資料となるのである。金黨汗國史家 Hammer-Purcell は此波斯著述家の著書を此目的に多少利用して文書の全文から翻譯して出してゐるが、^③脱文も誤謬も澤山ある。

ヴェ・エム、メリオランスキイの主として論じたるはムハメッド・ヒンズーシャフが引用せる Kudatku-Bilik (又は Kutatku-Bilik) で、成吉思汗のだと云はれて國民裁判官(斷事官)に對する訓令を載せたものである。此の書の標題は一〇六九年 Begera 汗のカシュガル知事の爲めに編纂されて近頃迄は土耳其語の最古資

料と考へられたる内容の全然異つてゐる書の名前と同じ事である。ペ、エム、メリオランスキイはボグラ汗

中に、Bilik(智識の義)の語と同じく Kudatku なる語も屬する様だ。

のウイグル Kudatku-Bilik はウイグル族の代表者なる成吉思汗の近臣に知られてゐたのは疑ふべからずとして、成吉思汗のだとせられてゐる書物は此十一世紀の著述に倣つて名を付けたのだと定めた。しかしボグラ汗が屬するカラハン朝なるものがウイグル族から出たかと云ふ問題は決定してゐないし、又ボグラ汗の Kudatku-Bilik の様な純回教的作品を或は佛教或は基督教を信じて宗旨敵きの回教とは到底和合し難いと思はれる成吉思汗のウイグル師傳達が採用し得たとは思はれる^⑥。兩書の名稱が同一だと云ふのは其本源が同じだからだと云へば容易に説明がつくだらう。カラハン家が出た民族は回教を採用する迄は、後に蒙古人に占有されたウイグル文化の感化を受けてゐたので、ボグラ汗の國にてはウイグル文字はまだ全くアラビア文字に變更されてはゐなかつた。^⑦官職其他の名稱のアラビア式及び波斯式以外にトルコ風のも見られるのみならず、種々なる形式で此等の名稱が後に蒙古人によつてウイグル人から借用された。^⑧是等の名稱の

此語の正しい意義は今迄決定されてゐなう。Yamberry の翻譯(Kut 幸福と云ふ語から出て「幸福ならしむる」)は V. V. Radlov によつて採用されたが、ペ、エム、メリオランスキイは之に數條の反問をした。彼が示す如く、ウイグル Kudatku-Bilik の著者は其序文に此書のトルコ語題名の外にペルシヤ語及びアラビア語のも引いてゐるが、此の兩語の方は共に帝國とか王國とかの意を含んでゐるので、自然トルコ語にも亦此の意味を持つてゐるだらうと想像するのであつた。ペ、エム、メリオランスキイがトルコ形容詞の Kudatku をイラン語王公の稱 chudat と結び付けて考へる事を試みたか否やは知らないが、アラビア優勝時代に多くの國主は此の名稱を付けてゐたので、現に露領トルキスタンの官制の内にも這入つてゐるが、トルコ方面では chudat の名稱は知られてゐる限りでは見付からぬ。そこで又余は他の假説を出した所、ペ、エム、メリオランスキイは彼の論文の注に之を引いたが、即ち、Kut と云ふ語は原義(幸福)以外吾等が「陛下」と云ふに

等しい汗位の名稱としても用ひられるので、随つて、Kudaku-bilik と云ふ名は字義通りの直譯(幸福を與ふる知識)以外に、「王公に教ふる知識」と云ふ他の義をも持ち得るのだ、とかうである。此説明は故べ、エム、メリオランスキイの意見にも「多分誤らないだらう」とあつたが、私には現に必ずさうだらうと思はれる。

已にべ、エム、メリオランスキイが逝去した後、余が偶然注意した十五世紀のアラビアの歴史家 Ibn-Arābshāh の資料によると Kudaku(又は Kutaku)と云ふ語は中央アジアに於てもウイグル文書の名稱として同じく使用されてゐた。イブンアラブシャフの言葉によると、「成吉思汗は自分の種族の智者や自分の國の賢人に命じて、彼等にとつては知識の目標とも亦旗印〔即ち徽號〕ともなる文書を編纂せしめた。彼等は彼の爲めに蒙古人の文書を編纂して、其助けによつて大事を決する様にし、そして其〔文書〕に彼〔成吉思汗〕の種族の名に據つて名稱をつけて、かくして彼の優勝を示す様にして、Kutaku 即ち kut 等の文書と云ふ語を用ひたが、是はあの破壊者〔成吉思汗〕の部族の事である」。イブンアラブシャフが Kutaku の語を成吉思

汗の出た部落の名(この名稱の正しい形は Kyiat^⑩で Kutat でなく、アラビア文字の性質から見れば其誤が分る)と一緒にしたのは全く誤つてゐるが、然し彼等が引用したウイグル文書の名稱が書名 Kudaku-bilik の前半と一致せる事は疑はれないだらう。

この新しい資料によつても上記の Kudaku の語の説明は破られ無い。成吉思汗の命により、ウイグルの文書を縉紳の若者達、其大多數は其の國の子弟だが學んだので、是等の文書こそ蒙古の慣例法(大札撒)の編纂、又は成吉思汗の金冊即ち蒙古族の公用記録の撰著に利用されたのだ。此の兩書は汗の寶庫に藏して、汗の一族の官人以外にては金冊を藏すべき名譽の義務が順に當る只數人の諸侯のみ許されて近づき見るを得るのだ。^⑪蒙古人の建てた國々では、ウイグル文書は特に「汗のもの」と云はれてゐて、それが爲めに國民も學者もそれを知らない時でさへも特に外交文書には續いて用ひられた。^⑫

ムハメッド・ヒンズーシャフの語によれば、蒙古ヤトルコ^⑬の「戰士及び住民」に與ふる命令にはウイグル文書が用ひられたので、國家の内へ編入された各國民は

自分の國語で命令を受けたら了解するに困しまぬだらうと云ふ主義から出たのだ。^{①⑥}さうすると西部波斯の遊牧民は當時尙ウイグル文書をアラビアのよりは善く知つてゐたと云ふ事に定めてよからうし、まして又其ウイグル文書には當時の實情とは關係が無くて只前代から傳はつてゐる傳説の影響を受けてゐる、そんな意味も含んでゐたと信ぜられる。他の蒙古國に於ての如くチェライル國にてもベルシャの書記官(*kati*)と並んで^{①⑦}*bachši*や^{①⑧}*bikiči*即ちウイグル文字でトルコ語に書く文書掛があつたし、辭令書も「大ビチクチイ」(*ulug bikiči*)の職務のは引用されてあるが、しかし集録に挿入された凡ての文書はアラビア文字でベルシャ語で書換えてあるのだ。(一九〇九年四月)^{①⑨}(V. Bartold.)

註① 此王朝に關する詳細なる著作をなしたのは A. K. Markov ("Katalog dželarijskich monet", Spb. 1897)である。チェライル家(*Dželajidy*)と云ふ語は同書にも又他の書にも採用されてゐるが、全く正當な形と云はれぬのはヂェライル(*Džajir*)は同朝が出た民族の名稱であつて族長の名では無いからだ。他の蒙古種族等と一緒に成吉思汗の征戰に與つて蒙古帝國の至る所に繁榮し、中には他種の民族として多くの蒙古トルコ人の風俗中に迄這

入りこんでゐる (H. A. Arisov, *Zamětki ob etničeskom sostavě tjurkskich plemen*, Spb. 1897, str. 32, 54, 114; "Zivaja Starina" 1896 g. の別刷を参照)。波斯に於るチェライル人の民族の源流はこんなので成吉思汗の子孫とは姻戚であつて王朝滅亡後自己の手中に政權を掌握してゐたのだ。

② Zap. Vost. Orl. Imp. R. Arch. Obšč., t. XIII, str. 01—023.

③ Hammer-Purgstall, *Geschichte der Goldenen Horde*, Pesht 1840, S. 463—516. ムンケシュ-カンブーシヤンの著書からの抜萃は同書の附録(特に 244—246頁)に收められ非常なる注意で出来てゐる。

④ 此語の正確な發音はまだ疑問である。ウイグル文字は *t* と *d*, *k* と *g* との區別が無つ。V. V. Rallov の云ふ Kudaku の讀み方にも V. Thomsen 教授の云ひ出した Kudagu の讀み方 (Kalei Szentle 1901, p. 245) にも語學的の根拠はある。ムンケシュ-カンブーシヤンが Kutagu と Kudaku と書してゐる。

⑤ 參照 H. A. Arisov, l. c. p. 165, note 及び Zap. Vost. Old. I. R. Arch. Obšč., t. XI, str. 348—の余の批評。

⑥ V. Bartold, *Turkesan v epochu mongolskago našetvija*, t. II, str. 419.

⑦ 東方トルキスタンの都市で十一世紀に鑄造した貨幣にはアラビア文字の外にウイグル文字のものもある。參照 A. Markov, *Inventarnyj katalog musul'manskich monet*

Imp. Ermitaža, Spb. 1896, str. 192—.

⑧ V. Bartol'd, l. c., p. 332.

⑨ Fluctus imperatorum et jocatio ingeniosorum. ed. G. C. Freytag. Bonnæ 1832, P. 232. イブナー・ラフマンの他の著(チャトル傳)の中のウィグデル文書に關する資料はBibl. Nationale(Notices et Extraits des manuscrits de la Bibl. Nationale, t. V, p. 586—588)に引用されているが、是等の資料には Kudatku なる語は見えない。イブナー・ラフマンの Kudatku に關する言葉は巴里一八二六年のコンシットに用ゐられた(J. J. Schmidt, Wärfung und Abfertigung der Klapprohschen sogenannten Beleuchtung und Widerlegung seiner Forschungen im Gebiete der Geschichte der Völker Mittel-Astiens, Lpz. 1826, S. 115) 随つて彼とハムナー・ブルグスタルとの間の論争の目的物となつてゐたが、其後定れられてメリオラヌスキーは彼の論文に此の資料を利用しなかつた。

⑩ 原文には kutat, muflat 二語を踏へる。「破壊者」は殆んど關係の無い形である。

⑪ Trudy Vost. Otd. I. R. Arch. Obšč. t. V, str. 39; t. XIII, str. 51. I. N. Berezin の意見によれば蒙古の發音は Kyiot に當る。

⑫ V. Bartol'd, l. c., p. 416

⑬ Ibid. str. 42 i 45.

⑭ Zap. Vost. Otd. I. R. Arch. Obšč. t. III, str. 3(V. V.

Radlov の語)。

⑮ 原文には sachroniřinan° ハムナー・ブルグスタルの續譯には "Feldbewohne" (l. c. p. 471)

⑯ ハムナー・ブルグスタルに續譯せる l. c. p. 470.

⑰ Ibid. この語の意味に就ては V. Bartol'd, l. c. p. 52 a. d. 417 を見よ。

⑱ Ibid., p. 332. ハムナー・ブルグスタルは文書の續譯の注(l. c. p. 470)に蒙古文書掛を同じく "kaib" と示しているが Leyden 抄本 No 574(f. 180a)では此場合 biñki の言ひ表しが用ゐられてゐる。

⑲ ハムナー・ブルグスタルに續譯がある。 l. c. p. 486—487.

(大正五年五月二十一日寫)

後記

この恐ろしく古い譯文原稿は久しく余の篋底に埋没して居つたが、昨年フト見付け出したのである。然し原論文は餘り我國では注意されてゐない様で(例へば蒙古學第二冊一九六頁を見よ)あるから、世に出して見ようと思ふ。然らば原文を参照訂正すべきであるが、どうしたのかこの雜誌も紛失してゐて見當らない。已むを得ず舊稿の儘にする外はない。大方の諒恕を請ふ。

(昭和十三年一月二十日記す)